

おやつのかん3 -ちょっとひとやすみ-

—いたずら分析 その1—

NO. 40



子どもに“いたずら”は付きもの。成長の過程だと言われても、子どもの行動には意味があると言われても、困ってしまうことには変わりがなく、イライラの種に違いはありません。越えていくものではありませんが、育ちがゆっくりな子は、そこまでの時間が長く、治まったかと思えば、また繰り返されることもしばしばです。その“いたずら”、その子その子によって、やっちゃう理由は様々です。今回はそのうちのふたつを考えてみましょう。

まずは、どの子も通る道ですが、“どうなっているのだろうか？行動”ですね。

子どもの初期の遊びは、自分の身のまわりのモノがどんなふうになっているのか知るための行動です。舐めてみたり叩いてみたり、押してみたり引っ張ってみたり投げてみたり、その中で自分に不快や不利益があったモノには手を伸ばさなくなってきました。「懲り懲り」経験です。熱いものには触らなくなる等がそれにあたります。逆に、おもしろかったモノには、とことん手を出していきます。扉の開閉やスイッチのオンオフ等がそれです。手当たり次第に手を出して“いたずら小僧”になっている子がいますが、よく見てみると、やり込んでおらず、いつも摘み食い程度のこと。十分に“いたずら”をしきっていないので、いつまでも浅いところで繰り返しています。同じ感覚だけでも少しスマートな遊びに変えられれば多少見守れるので、何度も何度も繰り返すことで満足し、次のステップに移っていきます。「あんずにいるときには少ないんだけど、家じゃ凄いんです」と同うことがありますが、きっと似たような感覚遊びがあるので、他をやる必要がないのでしょうか。ぜひ、あんずでやり込んでほしいなと思います。ティッシュを箱からぜ～んぶ出しちゃうことってありますよね。やってみたことありますか？一枚二枚と出していくうちに、ティッシュを出す感触が変わっていくんですよ。摩擦が減って徐々に出しやすくなって、終わりのほうは出しにくくなる。子ども達はこの微妙な感覚の変化から世の中を学んでいるのでしょうか。私たちもそうだったはず。いろいろなことに臆病だった子が“いたずら”をしだした姿を見ると、扉が開いてきたなと感じます。イライラしない遊び方にしていく工夫を一緒に考えていきましょう。

もうひとつ。人への関心の示し方としての“いたずら”です。

「こらこら！」と言われるような行為には、大人は間髪入れずに反応してきます。子どもの顔が笑っていたなら、まさしく“気を引くいたずら”です。「いいかげんにしなさい」と言いたくなる場面ですね。日本人は、「ワンダフル！」「ビューティフル！」と言う習慣がありません。よい行いには“うなずいて”終わりにしがちです。黙認ってやつですね。それじゃ子どもは納得しない。OKがないと心配なんです。だから、必ずすぐリアクションが返ってくる行動を選びます。言葉や行動でほめ、OKをたくさん出していく流れができてくると、その意味の“いたずら”は減ってきます。少し大きくなっても“いたずら”が多かったり、最近“いたずら”が目立ってきたなと感じるようなら、コミュニケーションが充実しているかな？と見渡してみてもよいかもしれません。

トンネルが長いと、出口があるのか心配になるし、疲労感も高くなります。



「まいったな～」の話をたくさんしましょう。きっと出口の明かりが見えてきます。(R1.9) K